

bookmark#4 「どうすればよかったか？」自主上映会

2025 年 11 月 15 日

logue（山梨県上野原市）

—参加者の言葉—

☆

マコちゃんは途中までずっと険しい顔をしていて、叫んでるシーンはドキドキした。投薬後、笑顔が増えたりマコちゃんの好きなことが見えてきて、マコちゃんはこの人だったんだな～って見えてきた。

投薬をもっと早くすれば良かった、ということが言いたいのではないけど、マコちゃんももっと笑顔で過ごせる時間が人生の多くを占められたら良かったなあと思う。

家族って独特のコミュニティだなと昔から思っている。知明さんが言っていたように「第三者を交えて話し合う」ということは勇気がいるけど大切。

（でもなかなかスッと受け入れられず進まないのもわかる）

最後に logue の井上さんとゲストを交えたトークも聞けてよかった。

障害・病気にかかってしまった人に対して福祉・医療の観点から主に話していたけど、どんな人にでも共通する話だなって思った。

健常者対健常者でも同じことが言えるってこと。

こういう家族の話をしたり聞いたりすると、自分の経験に置き換えたり「自分ごと」ベースで考えがちなけど、一歩、二歩引いた広い視点で考えることを意識したい。

☆

考えさせられる映画作品、初めて観ることができました。上映ありがとうございました。

お姉さん本人が約 25 年間家で過ごされてしまったこと、成人期・壮年期をもっとよい人生にできなかったのかと考えてしまい、観ていて苛立ちの感情が生じました。

特に、やっと医療に繋がり、3 ヶ月の入院で会話が成立し調理ができるようになった姿を拝見し感涙しました。それ故、なぜもっと早くできなかったかとの思いは残りました。

お姉さんだって、大声を出したり、眠れなかったりしたことは辛かったろうと想像します。

家族の中では弟さん（監督）がキーパーソンであったと思います。話し相手になろう、お姉さんが話し出すまで根気よく待とうのスムーズステップの姿は、ご両親とは異なる役割だったのが救いでした。

この映画を拝見し、当事者本人と地域の医療福祉との繋がりに於いて、ご家族と医療福祉関係者との関係作りは重要であるものの、時に難しいことだと再認識しました。

私は、疾患の治療は入院一辺倒とは思っていませんが、孤立はいけないと常日頃考えており、その思いを確認した気持ちです。どうもありがとうございました。

☆

沈みそうな気持ちになりました

もどかしい気持ちにもなりました

けれど、根気よく付き合われ、このような作品として残された知明氏に覚悟と心の柔らかさを感じています

どんなにぐちゃぐちゃな生活でもものに埋もれてしまっていて

きちんとランチョンマットを敷き、フォークとナイフで食事する家族

(お姉さんの財布はボールスミスだったのでは。いい財布をどなたが買われたのか)

母は娘をととても愛していた

頭がよく立派な経歴はある意味重荷になりうる

だから家に囲った？と感じた

子を持つ親として理解できる部分が全くないわけではなく

ほんの少しだが私にもあると感じた

好きなシーンは花火を見上げインスタントカメラで写真を撮るシーンです

知明氏の生活はどうだったんだろうか、幸せに過ごせていたのだろうか

最後に思ったドキュメンタリー映画でした

☆

「お姉さんがもっと早く適切な薬に巡り会えていれば」という思いは否めない。

藤野監督が収めたお父さんの晩年の姿からは、娘の病気への自分の向き合い方に後悔はないという、清々しさに似たものを感じた。お姉さんと共に花火を見る場面のほのぼのとした空気が、自分には切なさ、ドロっとした言いようのないもどかしさを抱かせた。

☆

一言での印象は私には愛が溢れた映画でした。

藤野監督もご両親もお姉さんに対する愛情とそれ故の期待とに絡めとられて生きてきた感じがしました。ともちゃん自身も。

最後にお父様が「後悔はしていない」っておっしゃって、それが私には全ての人のそれまでの人生が肯定されたように聞こえました。ともちゃんご本人もご家族も他人には想像できないような辛い時間を過ごしてきたと思いますが、あの画面からは辛さや悲しさだけでなく、それぞれの信念や生き方が見えて、観終わった後に改めて幸せとか生きるってどういうことなのかって考えさせてくれる映画でした。

家族を撮るというのは覚悟のいることだと思います。このような映像をみせていただきありがとうございます。

☆

精神疾患というよりも、ご家族の方が「姉」「娘」として向き合おうとしている姿が印象的でした。知明監督は最後までお姉さんの本心や気持ちを探ろうと、お父さま、お母さまは精神疾患というご病気よりもお姉さんの性質や性格から理解されようとしているように感じられました。『どうすればよかったか』鑑賞後も分かりませんでした。この映画を通して精神疾患との向き合い方、家族の難しさを考えさせられました。家族と向き合い続けるという選択はとても大変なことであったと思います。このような映画にまとめてくださり、本当に感謝しております。

☆

先ずは、このような上映会を開催してくださってありがとうございました。

私にとっては重い内容だったということもあり、その場では考えがまとまらなかったのですが、時間があいて思ったことがあります。

映画の中で、社会からクローズした親が悪いような言葉もありましたが、そこには時代背景の影響も大きかったのではないのでしょうか。抽象的ですが、そんな時代だったのかもしれませんが。（想像ですが）

更には、そんな国だったのかも…と考えていました。

1つ疑問なのは、閉ざされていた25年間で行政や近所の人がお世話をする機会はなかったのでしょうか？あったけれど親御さんが遮断したのでしょうか？

というのも、令和の今の時代ならその頃より福祉のシステムが整備されているので、行政などから何らかのアプローチがあるのかな、ご近所さんや民生委員さんがよい意味のお節介をするのではないかなと思いました。田舎にすんでいるので特にそう思いました。

又、統合失調症や障害に対する世間からの偏見や理解もその頃に比べれば多少は緩和しているように思うからです。

マコさんも病気を抱えていたが、同時に認知症になる前のお母さんにも何らかのケアが必要だったのかもしれませんが。お母さんが現実に向き合わず辛い気持ちに蓋をしてしまった。それでマコさんの治療が遅れてしまったのでは。当時の社会がそれを象徴しているのではないかと私は考えました。

とはいえ、現代も社会の問題は多くありますが、わたしたちにできることはないかと、改めて考えさせられた映画でした。

☆

第三者から見た正解と、家族の正解は時に違うこともあるのかもしれないと思いました。

早く受診していたら苦しい時間はある程度解消されたのか、目の前の子どもの姿を客観的に見ることは難しいと思うし、信じる気持ちも親だから持つでしょうし、冷静な対応が難しくなりますね。教育虐待とも、心理的虐待という言葉では表せない感情がわきました。

☆

その人の性格は変わらずに持ち続けるのだと感じた。

家族の問題は家族で解決するものと考えてしまうが、家族だからこそ向き合うことができない場合もある。私も、全く状況も違うけれど、家族（親族）だから言えない、違うと言いくらい、向き合うのが恥ずかしいと感じることがある。家族の中に、第三者が入ることで状況を変化させることができる。しかし、家族の中に入っていくことは大変難しいとも感じる。そのときどうするのが正しいのかはわからないが、逃げずに向き合い続けることは大切なことだと思う。言葉では簡単に言えるが、実際は容易ではない。

前述と重なるが、どうするのがよかったのかに正解はないのかもしれないが、知明さんがお姉さんの声を聴くことを続けたこと、お父さんやお母さんに問いかけ続けたこと、家族から離れなかったことは、よかったことだったのではないかと感じた。

☆

映画鑑賞後、ずっと「どうすればよかったか？」考えています。

入院した際に合う薬が見つかりよかったと思いました。早期に合う薬と出会えたらよかったとも思いました。

皆使命をもって生まれてくると学びました。

藤野家の皆さまはそれぞれにどんな使命があったのだろう…と考えました。

この作品に出会えてよかったと思います。

ひとりでも多くの人に鑑賞してほしいと願います。

☆

上映頂き、ありがとうございました。

鑑賞させていただいた上での私の考えです。

物質的な「世界」はひとつだけど、人はそれぞれ異なる世界で生きているのだと感じました。次に、人が人に行く全ての言動において、源泉は愛と優しさであると受け取りました。もうひとつ、その愛や優しさは、人と人の間で伝わる過程で時に欠けたり歪んだり、揺らいだりすることがあるという気づきを得た気がします。

ひとりの「人」として生まれ、ひとりの「人」として死んでいく存在でありながら、その途中には「人間」として社会で生きる期間がある。「人」は個としての存在で、「人間」は人と人の間で生きる社会的な存在なのかなと、そんな思いが頭の中をぐるぐると巡っています。

☆

頭の良い家庭だったゆえに起こってしまったことのように思います。

弟さんが誰か他人に頼って話をしていれば違った方向に向いたのではないかと 생각합니다。受け入れることができているならば。

☆

色々考えさせられる映画でした。

結論の出ない内容は私にとってこれから考える時間となっていくでしょう。

「伝える力」「知る力」「共に過ごす力」これらを養うにはどうすればよいでしょうか。

監督に聞きたかったです。

☆

『どうすればよかったか?』が鑑賞者への問いだとするなら、私は『こうしてよかった』と答えたいと思った。この動画は藤野監督さんにしか捉えられないものだし、記録すると同時に長年に渡り閉じ切った家族以外に伝え問うことも前提として撮られたもので、藤野監督さんが『こうしたい』と思って外に伝わる形にしたと思ったから。藤野監督さんは動画の中で家族の誰一人に対しても『こうすべきだ』とは強く言わなかった。家族一人一人の在り方を大事に思うからこそだと思った。と同時に動画を撮りながら家族と関わることで、客観性と距離感を保ちながら自身を守ってもいたんじゃないかと感じた。

鑑賞者である私も『こうすればよかったんじゃないか』の思いが湧いた。それは自らの生活の中で生かしていきたい。このドキュメンタリーは答えを指し示すために公開されたものではなく、観る人観る人が自身の生活に置き換えて問い直し、それぞれの答えを持つことを提起されたように感じた。

絶対に見たいと思っていた映画でした。山梨で鑑賞する機会を作ってくださいありがとうございます！

☆

この作品を観ながら、自閉症情緒障害児学級を担任していた頃に出会った教え子のことをずっと思い出していました。

小学3年生から人との交流が一切もてず引きこもりがちになり、やがて誰とも話すことができなくなってしまいました。

そんな娘を心配した母は、娘のために我が子の発達特性について周囲に打ち明けましたが、それについて彼女が

「誰かに話してほしくなかった」と、唯一発してくれました。

人は良かれと思って支援という名でいろんな手を施します。

ただ、すでに自我が芽生えていた彼女（当事者）は、本当にそれを望んできたのか…

優秀でエリートな道を歩んできたお姉さんも、発症し変わり果てた自身を受け容れられていたのだろうか。

支援は、当事者が自分を受け入れて初めて成立するものだと思います。

ラストシーンにあったお父さんの「間違いではなかった」

この言葉にすべてが表れていて、

亡くなったお姉さんの真意は分からずじまいの今、藤野家はそう信じることで明日もきつと生きられていたのかもしれない。

☆

どうすればよかったか.....観た上で、本当に、言葉に詰まり立ち尽くしてしまうような気持ちにさせられてしまうような過去への問いかけ。でも、監督が息子として、弟として、「記録」という方法で藤野家に立ち向かい、ベストを尽くしたとしか思えません。お姉さんとの穏やか（と、鑑賞者として感じさせてもらえる）な数年間の様子は、監督の頑張りが無ければ成しえなかったことです。なんてことない会話が、ちゃんと通じているだけで落涙してしまいました。映画作品として広く届けてくださった勇氣にも拍手を送りたいです。

自分自身にも「どうすればよかったか？」と思う、過去の家庭内のアレコレはあって、こんなに立ち向かえただろうか、と考えさせられました。「考えさせられました」なんて、当たり前前の感想ですが、考えたくないと逃げていたようなところがあることを考えさせられてしまった、みたいな、そういう意味で「こわかった」作品でもあります。

家族も家庭も、みんな違って、違う問題も抱えちゃう。だから、絶対的な『正解』は無いはず。でも時代や風土が作ってしまう『正解』らしきものの存在には気をつけねばなりませんね。

過去は取り戻せないけれど、「どうすればいいのか？」という、未来への問いかけに変換していくことはできるのかもです。そしてその答えは1つじゃない。うーん、わからない。きっと、内側で問題を醸成させるのではなく、他者に開いて助けを求めたり、相談することがすごく大事なのだと思うのです。でも、実はそういうことにハードルを感じている自分にも思い当たってしまいました。

☆

地域の診療所で看護師をしています。先生もお話しされていましたが、25年間社会がこの家庭を孤立させていた事にとても考えさせられました。

この映画を観て、外来で関わっている方や近隣で気になっている方々の家庭内を見させてもらっているような気持ちになりました。

実際に映像で観ると、想像をはるかに超えていて驚いたと同時に、孤立した中での安定した生活があることを知り、なかなか介入が進まない現実もよくわかったような気がします。

監督にとって、相談する場はありましたか？

介入が難しくても、話を聞いてくれる方は誰かいましたか？

監督の視点で必要だった人やものがあつたら是非教えていただきたいです。

貴重な記録を公開して頂き、感謝しています。

ありがとうございました。

☆

包括支援センターの職員をしています。そして家族に摂食障害の人がいます。市民活動で対話の会もやっています。

病気や障害がある人を家族に持つ人は、本人や他の家族との関係を保とうとしたり否定する理由を探したり、自分の仕事や生活のバランスを保とうと非日常的な出来事も気にしないようにしたり、本人以上に変わることが難しくて自分に失望したり、程よく相談してリフレッシュしたり、本質的には何も変わらないと相談を無駄だと感じたり、揺れながら、自分を守りながら、生きているのかな…と思います。

この作品の監督さんが家族にカメラを向け、対話をし、問いを投げかけながら記録を取ることを選択したことで、家という壁の向こうに隠れがちな、病気の名前の向こうに隠れてしまうであろう生活の一つ知ることができました。

思うことは、マコさんが不安に駆られている心を、家族以外の存在で気付けたり、何となくでも受け止められたり、色んな視点や考え方がある雰囲気や家族とも共有できたり、できたらなあ、といったことです。心の平安を、どうすれば守れるものなのか、それは、答えがないわけではなく、いくつかの答えにつながるヒントは探せるのではと思っています。

私も暗闇の中でもがく家族に何もできていないような気持ちで日々を過ごしたりしています。でも、対話は救いになるし、きっかけをくれる。知ることの入り口になる、と思っています。ありがとうございました。

☆

どこの家にも、ドアを閉めてしまえばわからない問題や秘密があるのかも知れません。監督は映像作品という形で鍵を外してドアを開けて、外に出してくださったと思います。実は個人的な思いが邪魔をして、公開当時に映画館で鑑賞する勇気がありませんでした。

感想の代わりに自分のことを書きます。

私には「精神分裂症」と呼ばれていた時代に統合失調症を発症した叔父がいました。治療方法も理解も充分でない時代だったと思います。

今でも叔父の人生を思う時に、申し訳なさが胸に突き刺さったままです。当時私は中学生から高校生くらいだったと思います。でも、いまだに解決できない感情が残っています。

まとまらなくてすみません。ほとんど他人に話したことの無いことです。

ローグさんでなら、と観ることができました。今はそこまでです。ありがとうございました。

☆

両親にとっては、受け入れ難い事実であったと思います。分かっているが、そうじゃないと言ひ聞かせていた。両親は娘に精一杯寄り添って「間違いじゃない」と思えたと思います。ただ、娘さん側に立つと、もっと違った人生や経験をすることができたのでは？彼女の生き方を狭めてしまったように感じました。私は相談を受ける側です。今は本人の意思、その人らしい生き方を尊重することが大切と言われていますが、ご家族がいる場合はやはりご家族の理解や考え方にかなり左右されてしまいます。家族だからこそできること、逆にできないことがあるので、周りの他人に頼ってもらえたらとおもいました。

☆

どうすればよかったのか。深く考えさせられるドキュメンタリーでした。お父様、お母様、弟さんそれぞれがお姉さんのため、またご自身のため、よかれと思いながら、閉ざされた空間の中で苦悩し辛い日々を送られていた事を映像として私達に届け問いかけてくださったことに深く感謝します。弟さんが、真摯にお姉さんに話しかけた後のしばしの沈黙に彼女は何を感じていたのか。お姉さんの本音に耳を澄ませ、本来のお姉さんを取り戻すことを信じる気持ちが伝わり一緒に耳を澄ませました。

人は精一杯誰かの期待に応えよう自分の夢を叶えようと頑張って、でもどこかで限界を超え、躓いて自分も傷つき誰かを失望させたことにも傷つき、そんなはずはない、傷ついてはいないと自分を護り、生きのびるために心を何処かへ避難させるのかもしれないと思いました。

一番身近で長く生活している家族なのに、本当に大切なことは話せていないのは他人事ではなく、映像を通して家族一人一人に問いかけ続ける監督に家族への深い愛情を感じました。無関心や諦めでなく繋がろうとする気持ちを持とうと思いました。

お父様の「失敗ではなかったと思うよ」に少しでも苛立ち、少しでも救われました。

かかった時間は取り戻せないけれど、弟さんの思いで本来のお姉さんを取り戻すことができましたね、誰の人生も失敗はないと思います。

☆

私も自分のごく身近、家族の一人が統合失調症です。

「どうすればよかったか？」

答えは簡単、患者を早期に入院させることです。

家族を入院させることは、その家族を見捨てるようにも思いましたが、入院して2週間もすると元の家族に戻ってました。この病気はある日突然襲ってきます。

そして患者本人はその日から時間が止まってしまいます。無駄な人生を送ることがないよう患者を入院させることが本人のためになると思います。

☆

精神科の障害に対しては昔からひどい偏見があるので、家族はそのことを周りから隠したいという気持ちは強いと思う。

特に両親は知的レベルが高く、社会的な地位も高いであろうからその気持ちは人一倍強かったのかもしれない。

しかし、「どうすればよかったか」の問いには、早く診断を受けて治療を受けるべきだったが回答だと思いながら、ただこれが弟さんの問いであれば、頑固な両親の反対を押し切って姉を病院に連れて行けたかというとなかなか難しかったとも思う。きっと家族の崩壊も覚悟しないといけなかったでしょう。

私は障害を持つ人は一定の割合でいるのが当然で、今の自分がそうでないからと言って、自分の子供や孫には起こり得ることなんだということがみんなの常識になればいいと思っています。そうすれば、その子が人としての幸福を得られるような治療やサポートが当たり前の社会になってくるはず。LGBT も同じだと思う。みんなが存在を認めることで誰もが普通に暮らせる世の中になって欲しいと思う。

そうであれば、今回のような悲劇は起こらなかったかもしれない。

これからの「どうすれば」は、まわりの人たちにこの理解を広めるためにどうするかだと思います。

最後に長年記録を取り続けて、今回考える機会をいただけた監督に感謝します。

ありがとうございます。

☆

まずは、藤那知明監督に敬意を表します。この家族の記録にどれだけの痛みを伴ったのか計り知れません。私は精神保健福祉士なので医療側の視点で見ることが多かったわけですが、ご両親のお気持ち、生活ぶり、そして何よりお姉様の病状や生活を見ることができて、ああ、皆さんはご自分なりの人生をまっとうされたんだなと感じて、心を動かされました。昭和の精神科病棟を知るものとして、精神科に即刻入院させるべきだったと声高に叫ぶことはできません。でも、あれだけの混乱の中にいたお姉様が、精神科への3ヶ月の入院の後、服薬調整とその継続がうまくいったのか、ご自分を取り戻されて、会話が噛み合う様になったことは救いでした。優しすぎるほど優しいお父様が最後に残られて、この映画の公開を藤野監督にきちんと許されたこと、私はとても嬉しく感じました。4人家族、各々の価値観の中ですれ違いながらも、愛情深く、ご自分なりの人生をまっとうされたこと、そしてそこに他人の良いとか悪いとかと言う意見などは存在しないのだと感じた次第です。素晴らしい映画でした。ありがとうございました。

☆

頭に浮かんだことを並べてみます。

●パパとまこちゃん(、ともちゃん)の花火

大人になると、花火って少し切ない、そんなイメージを持つようになる気がします。この映画はドキュメントなので意図したものではないと思いますが、全体的に重い内容の中で、数少ない、ほんの少しの救いと切なさを感じられるシーンでした。好きなシーンです。

●南京錠など

閉じ込めるのではなく、勝手にどこかに出かけるのを防ぐのが目的とのこと。まこちゃんにとってはそうではなかったかもしれないが、納得できる。では出られないようにする、にはどうすればのだろう。認知症でも同様に出处けて行方不明になったり、万引き犯になったりする可能性はある。いつでも我が身に降りかかる問題だと思います。

●ママの認知症とまこちゃんの統合失調症

異なる病気ではあるが、症状が被る部分があります。映画でもシーンがありましたが、壁を伝って男が家に侵入する、といった妄想・妄言。充分自分ごととして迫る問題だと思いました。ママ(パパも)が受け入れられなかった統合失調症、それと似た症状が、ママに降りかかる(本人は自覚ないと思いますが)。複雑な気持ちで拝見していました。

●地域とのつながり

映画では描かれていませんでしたが、ご近所とのお付き合いは希薄そうな印象を受けました。医療・福祉の世界では、散々出て来るワードです。机上では誰もがその通りと頷けますが、実際は。私も然り。マンション住まいで、マンションの中ですれ違えば挨拶はしますが、お付き合いはゼロに等しい。難しいですね。

●医師という職業の特殊性

昔ほどではないですが、やはり特殊な部分があると思います。一般的には収入が高い。「先生」と呼ばれる。病院というある意味閉鎖的な世界。きっと自身でも無意識に、意味のわからないプライドに支配されるのかな。映画でも、あの状況下で国家試験受験、研究、論文作成。側から見ると常軌を逸していると思うけど、当人(パパママ)は気づいていないことが多そう。

●では、どうすればよかったか？

自分もしくは自分の家族が、と考えると。研究や論文作成といったことはしないけれど、認めるのが難しいことは間違いない。例えば、親が認知症になったとして、兄弟が統合失調症

になったとして、それをフラットに受け止められるか！話せるか、判断できるか。他人なら
できるかもしれないが、難しいと思います。医師でなくても難しいと思います。勇気を持っ
て家族で話せるようにしておく、そして、勇気を持って話せる他人(友人、知人、仲間、他)
を作る、簡単ではないですが、まずはそこかな、と。

☆

家族のかたちに、人との関わりに、障害に、「答え」はない。

自己決定とは何だろう。そうせざるを得ない、そう話すしかないことだってたくさんある。

治る／治らない の二元論ではとらえきれない。

“よい”人生だったか？ そんなこと「私」にだって分からない。

世界は「他人」でできている。

誰かが名前をもった存在として私の人生に関わるとき、私の人生が私だけのものではない
ことを知る。それが一瞬でも、わずかな会話でも、沈黙の共有だったとしても。

絵空事だとか、偽善だとか、勝手にラベルを貼ることで見えなくなるものがある。

私は、私のことも、誰かのことも、考え続けることをやめたくない。